

第57回

日本伝統工芸展金沢展



日本工芸会保持者賞「淡青釉裏銀彩花春秋文鉢」中田一於（石川）
—日本伝統工芸展金沢展より—

特別陳列

■ 万葉集の世界 —平城遷都1300年—

曹洞宗の名刹

■ 大乘寺の名宝

■ 開光市展 —ギガース（巨神）の彷徨—

■ 系譜で見る近代日本画

- 今月の企画展示室案内
- 企画展Topics 〈1〉
- ミュージアムレポート
- 行事案内
- 所蔵品紹介



東京都知事賞「銀彩蒔絵箱『潮彩』」田中義光（石川）
—日本伝統工芸展金沢展より—

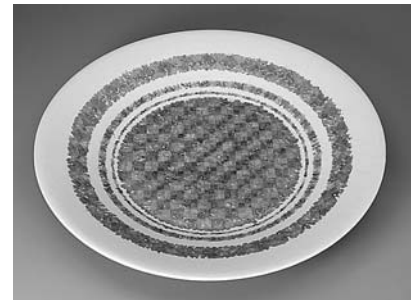
第57回

日本伝統工芸展金沢展

主催／石川県教育委員会、日本放送協会、朝日新聞社、北國新聞社、日本工芸会
 後援／文化庁、富山県教育委員会、福井県教育委員会

10月29日(金)～11月7日(日) 会期中無休
 最終日(7日)は午後5時まで(入場は午後4時30分まで)

1F企画展示室



高松宮記念賞「金欄手彩色皿」
吉田幸央 (石川)



NHK会長賞「接合象嵌花器『回峯行』」
坂井韶聖 (石川)



朝日新聞社賞「漆象嵌盤『涼蔭』」
山岸一男 (石川)



日本工芸会新人賞「樺造六稜盛器」
佐竹巧成 (石川)

我が国は、四季の気候条件に恵まれ、多様な自然環境を形成しています。その中で、各地の風土に根ざした工芸品が生み出され、伝統技術を大切に継承し発展させてきました。本展は、この優れた伝統技術の保護と後継者の育成、ならびに伝統工芸に対する普及を目的として、毎年開催されるものです。

今回は、陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・人形・諸工芸の七部門の入選作品七三二点の中から、重要無形文化財保持者・受賞者等の作品と、北陸三県、及びその他の地の入選作品を含め、約三五〇点を展示します。今年の石川県の入選者は八二人で、次の六人の方が受賞されました。

《陶芸》【高松宮記念賞】吉田幸央氏、【日本工芸会保持者賞】中田一於氏、《漆芸》【東京都知事賞】田中義光氏、【朝日新聞社賞】山岸一男氏、《金工》【NHK会長賞】坂井韶聖氏、《木竹工》【日本工芸会新人賞】佐竹巧成氏

◆列品解説日程◆

十月 三十日(土)	十一月 一日(月)	十一月 二日(火)	十一月 三日(水祝)	十一月 四日(木)	十一月 五日(金)	十一月 六日(土)	十一月 七日(日)
三十一日(日)							
午前十一時～	午後一時三十分～						
《木竹工》川北良造	《金工》大澤光民	《金工》村上浩堂	《陶芸》吉田美統	《漆芸》林 暁	《人形》山本榮子	《木竹工》灰外達夫	《金工》中川衛
《染織》每田健治	《漆芸》山岸一男	《陶芸》中田一於	《陶芸》宮西篤士	《漆芸》中野孝一	《染織》二塚長生	石川県立美術館長 嶋崎 丞	

◆講演会◆

会場 日時 講師 演題
 美術館ホール 十月三十一日(日) 午後一時三十分～
 「柿右衛門の世界」
 十四代酒井田柿右衛門氏(陶芸家・重要無形文化財保持者)
 美術館ホールへ聴講無料

観覧料	一般	大学生	高校生以下
個人	六〇〇円	四〇〇円	無料
団体	五〇〇円	三〇〇円	無料

団体は二十名以上
 ※当館友の会会員は、受付での
 会員証提示により団体料金に
 なります。

学芸員の眼

国宝「万葉集巻第三・第六残巻（金沢万葉）」

『万葉集』は、奈良時代の歌人大伴家持によって編纂され、平城天皇によって再編纂されたといわれる日本最古の歌集です。全二十巻からなり、長歌・短歌・旋頭歌など四五〇〇余首が含まれます。万葉歌人として有名な柿本人麻呂、山部赤人、大伴旅人、山上憶良、大伴家持をはじめ、天皇から兵士・農民に至る多彩な約四八〇名の万葉人の心情が、おおらかに詠まれています。

前田育徳会が所蔵する『万葉集』は、その伝来から『金沢本万葉集』と呼ばれ、その入手時期は明確ではありませんが、五代藩主綱紀の箱書から三代利常の時代の収集とされています。筆者は、源俊頼とされていますが、現在では平安時代後期に能書家として活躍した藤原（世尊寺）定信と考えられています。前田家では巻第二、巻第三目

本年は、平城遷都より一三〇〇年の節目の年です。当時は中国大陸から漢字が伝来したことで、それまで文字を持っていなかった日本人が、ようやく漢文や漢字から作った万葉仮名を用いて、文字による表現が可能となった時代です。そこで歴史書である『古事記』や『日本書紀』が書かれ、日本最古の歌集である『万葉集』が生まれたのです。

本展では、前田育徳会の名品である国宝『金沢本万葉集巻第三、第六残巻（金沢万葉）』を、(一)『万葉集』の成立とその背景、(二) 国宝『金沢本万葉集』について、(三) 平安時代の和歌の隆盛と『万葉集』、(四) その後の『万葉集』、(五) 『金沢本万葉集』の伝来と収集という展示構成で、文字の美はいうまでもなく、料紙装飾とともに日本文化の根幹ともいえる和歌の世界をご覧いただきます。

次、巻第四、巻第六の一部を所蔵しており、明治

四十三年の明治天皇行幸に際し、十六代利為侯が

巻第二、巻第四を一帖に仕立て直して天皇に献上

(宮内庁三の丸尚蔵館蔵) し、残りを所蔵してい

ます。また、前田家には芳春院が所持していた『万

葉集』がありました。これは三代利常が四女富

姫の嫁いだ八条宮家へ献上した『桂宮本万葉集』

(御物・巻第四残巻) で、現存最古といわれる平

安時代中期の写本です。筆者は、紀貫之とされて

いましたが、現在は源兼行と考えられています。

なお、重文の手鑑「野辺のみどり」は、主に利

常が収集したと思われる古筆切の中から利為侯が

選ばせて手鑑にしたものですが、『金沢本万葉集』

の断簡や『梅尾切』（『桂宮本』の断簡）が含まれ

ていますので、あわせて展示します。

特別陳列

万葉集の世界 — 平城遷都1300年 —

10月28日(木)～11月28日(日) 会期中無休

前田育徳会
尊經閣文庫分館

第4展示室

ひらき こういち

開光市展

—ギガース（巨神）の彷徨—

10月28日(木)～11月28日(日)

会期中無休

開光市氏の特集展示を行います。開氏は昭和三十三年金沢市に生まれ、金沢美術工芸大学大学院を五十九年に修了、在学中より国画会展に入選し、数々の受賞を経て、若くして国画会員となった俊秀です。現在、日本洋画壇において最も強烈な輝きを放つ画家と言えましょう。

当館所蔵品を中心とした油彩八面で構成しますが、縦・横3m×7mや、3m×9mなど、一点がともかく巨大です。会場に足をお運びいただければ、まずその大きさに圧倒され、次いで異形の巨人が横たわる怪奇な画面に驚き、そして近づくにつれて、その精緻きわまりないマチエール（絵肌のテクスチャ）に魅了されることになるでしょう。巨大な画面を間断なく描ききる構成力と微細なマクロの世界にさまようかの複雑で美しい絵肌。遠くから見ても間近で見ても存分に味わえ

る作品群です。

平成元年の「装置」から十九年の「変奏曲」まで、国画展や日動画廊での個展出品作を順に見ていきますと、この画家が人体の変容を起点に、怪異な巨人達に姿を仮託して、救いを求めての流浪譚を描いているのだという感がいたします。

ジャイアント（巨人）の語源となったギガースは、ギリシャ神話に出てくるゼウスに滅ぼされた巨神達で、上半身は人、下半身は大蛇の姿をしていました。開氏の描く巨人も胴体が異様に長く、尾を持つていたり手が数本あったり、あるいは巨大な頭がひっくり返っていたりと多彩な姿で描かれます。しかし、いずれもが怪異でありながら悲しみを帯びています。「人」とは何なのだろう。どう歩めばいいのだろう。そうした思いがこれらの大作に込められているのだと感ずるのです。



「変奏曲」平成19年

第2展示室

曹洞宗の名刹

大乘寺の名宝

10月28日(木)～11月28日(日)

会期中無休

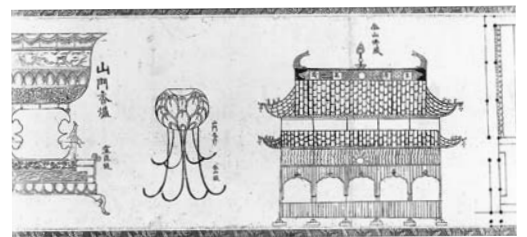
加賀の古刹、大乘寺の文化財を紹介します。大乘寺は、加賀の守護であった富樫家尚により鎌倉時代末の弘長元年（一二六一）、現在の野々市町に創建されました。真言僧の澄海を住させ、福井の永平寺から徹通義介を招いて禅寺としました。徹通禅師は開祖道元から数えて三代目にあたり、大乘寺が永平寺以外では最初に建てられた曹洞宗寺院であることから、「曹洞宗第二の本山」とも称されることになりました。

その後、永光寺・総持寺の開山でもある大乘寺二世瑩山紹瑾（三世明峰素哲の時期に基礎が築かれ、室町時代には足利幕府の祈願寺として寺領・屋敷が安堵されました。しかし一向一揆により保

護者である富樫氏を失い、その一揆を平定した柴田勝家の兵火によって、堂宇も焼失してしまいました。

二代藩主前田利長の時代に金沢木の新保（現在の金沢市本町）に移転・再興され、さらに家臣本多政重により、本多家下屋敷の隣接地（現在の本多町）に移転します。その後、藩より与えられた現在の地に移転し、今日に続くことになるのです。

現在、当館に一括寄託される大乘寺の文化財は、古文書・絵画・工芸の類などですが、今回はそれらのうちより、重要文化財『佛果碧巖破関撃節』（一夜碧巖集）、『支那禅刹図式』（寺伝五山十刹図）などを展示します。



重文「支那禅刹図式（寺伝五山十刹図）」

第7～9展示室

第63回 示現会展巡回金沢展

11月10日(水)～11月14日(日) 会期中無休
午後5時で閉室(最終日のみ午後4時で閉室)

(社)示現会は、昭和二十二年に創立され、本年四月、東京国立新美術館で第六十三回展が開催されました。その巡回展が石川県内で初めて開催されることになりました。本部基本作品六十点と地元石川県の作品三十余点を展示致します。

示現会展は、日展傘下の洋画展で写実を中心とした作風で広く美術愛好家の鑑賞をいただいで居ります。設立以来(故)大内田茂士、(故)榎原健三の両芸術院会員を輩出するなど、確実に成長を続けています。本展開催により多くの方に、高覧賜り、私共二人ひとりが研さんを重ねて、今後も県内美術界の恒例行事になれるよう努力してゆきたいと思っております。

◇入場料
一般／五〇〇円(前売り・四〇〇円・十名以上の団体・四〇〇円)
六十五歳以上／四〇〇円 大高生／三〇〇円
障害者手帳をお持ちの方(付添者含む)・中学生以下／無料
※当館友の会会員は、会員証提示により前売料金
※会員の他二名まで同額

◇連絡先 石川郡野々市町太平寺二一四七
示現会石川県支部 支部長 神田直次
電話 〇七六一二四八一八八六

第6展示室

系譜で見る近代日本画

10月28日(木)～11月28日(日)
会期中無休

「日本画」という言葉が初めて公に使われたのは、明治十五年にフェノロサが行った講演『美術真説』とされています。幕末から明治にかけて西洋から油絵を中心とした西洋的リアリズム絵画が移入され、日本の美術界に台頭し始めます。それに対抗する形でアメリカ人のフェノロサが、日本古来からの伝統的絵画スタイルを「日本画」(Japanese painting)と名付けその長所を挙げ擁護したので、「日本画」という呼称は、「西洋画」と対概念として出現したという経緯から近代以降の作を指すのが一般的です。ところで「近代」という時代区分ですが国によって違い、日本では通常、明治維新から第二次大戦までを「近代」と呼び、戦後から現在までは、「現代」としてはいるようです。

明治期以降、幕府御用絵師の狩野派をはじめ、四条派、土佐派など古来からの流派は徐々にその姿を消していきます。そのような時代を背景に、あえて「系譜」をテーマに取り上げてみました。石川においても北陸絵画協会や金城画壇の成立をみたこの時期は、画家たちが伝統と革新の狭間で表現の追求に情熱をかけていた時期といえます。明確な流派の区別が消えていこうとしていた近代において師弟のつながりはどのような役割を果たしたのでしょうか。石川ゆかりの作家を中心とした展示ですが、垣間見ることができればと思います。



「農夫耕作図」高村右暁

石川県内の水墨画愛好家団体を網羅した統一展です。近年愛好者の増加と作品の向上が著しい県水墨画界の結束を図るとともに、愛好者拡大を目指すねらいの展覧会で、作品は広く愛好者から公募して審査。入選、入賞作に委嘱作品も併せて展示し、水墨画の魅力を伝えるものです。

◇入場料
一般・大・高生／五〇〇円(四〇〇円)
中学生以下無料()内は前売料金
※当館友の会会員は、会員証提示により前売料金

◇問い合わせ
金沢市南町二番一号
北國新聞社事業局内
「第二十回記念 北國水墨画展」事務局
電話 〇七六一三〇一三五八一

第7～9展示室

第20回記念 北國水墨画展

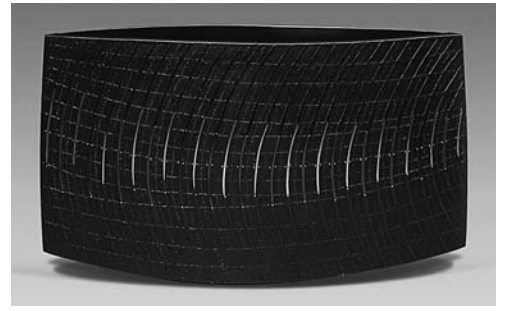
11月20日(土)～11月28日(日)
午後6時まで(入館は午後5時30分まで)

企画展Topics <1>

「加越能の美術

—明治から現代の絵画・彫刻・工芸—

会期：2011年1月4日(火)～2月6日(日)



響韻 大澤光氏
高岡市美術館蔵

秋の当館企画展「加越能の美術—縄文から江戸時代までの名宝—」に続き、明治以降の作家を集大成した「加越能の美術—明治から現代の絵画・彫刻・工芸—」を明年一月に開催します。いわばパートIIにあたるもので、この二つの展覧会で、古来より加越能と呼ばれた石川・富山地域、縄文から現代に至る美術工芸を、通史でご覧いただくという構成になっています。

秋季展で示したように、中央との地理的要因もあり、文化的独自性をこの地は育んできました。ことに、江戸時代、加賀藩の文化政策によって美術工芸は大きく発展いたしました。しかし、明治維新により、職人や画工は、武家や社寺など従来のパトロンを失い、存亡の危機に直面することになったのです。

二百数十年続いた武家文化は幕末期には洗練の極にあつたのですが、明治の指導者達は、多くが辺境の薩摩や長州の下級武士達でしたから趣味がだいぶ異なります。明治の初め狩野派に代わって隆盛したのは南画でしたが、それは統治者の好みに適ったということでした。西洋化の波は一時期伝統的なるものすべてを、旧弊なものともみなし、打ち壊す勢いでした。こうしたさなか、海外における万国

博覧会で工芸品が好評を博し、輸出産業として脚光を浴び、殖産興業の一翼を担ったりもいたします。

そして、明治期がそれ以前と大きく異なるのは、職人や画工が作家としての意識を強く持ち始めるということでしょう。今のいわゆる「芸術家」という存在が生ずるのでした。

本展では、大きく転換する明治期を起点に、大正・昭和を経て現代に至る石川・富山両県の美術工芸が、どのように展開していったかを、名匠・名工の対照などを織り交ぜながら概観いたします。

出品作家、作品の詳細は次号だよりに掲載いたします。



嵐山双瀑 下保 昭 富山県水墨美術館蔵

「コラム」 知識の泉 国の指定文化財

平成二十二年十月一日現在、国宝の総点数は一、〇八一件、重要文化財は建造物二、一五二件、美術工芸品九、五二二件の合計一、六七四件となっています。そのうち石川県には国宝二件、重要文化財一三〇件（建造物四十三、美術工芸品八十七）が所在しています。

先の「加越能の美術—縄文から江戸時代の名宝—」では、県内に所在するその国宝二件と重要文化財二十七件を公開し、県外所在のもの十四件を借用しました。指定文化財をこのように大規模に公開する展示は、国立の博物館を除けばきわめて珍しいと言えます。

石川県の重要文化財が国全体に占める割合は一パーセントを超えており、全国二十一位、北陸では新潟をもしのぎ、最上位です。日本一は東京で、国宝二六七、重要文化財二、〇八九件。明治以降、政治経済の中心地として多くの人とともに文化財が集まった結果といえます。しかし持ち運びできないことに加え、太平洋戦争で大きな被害を受けたこともあって、建造物は二件のみです。

東京に京都・奈良を加えると

ミュージアムレポート

キッズ☆プログラム

夏休み親子体験講座・鑑賞講座



子どもたちは学年も近く、自分の意見をたくさん出しながら楽しく講座を行うことができました。

学校出前講座が、九月二十八日（火）、小松特別支援学校を会場に行われました。小学部から高学部とたくさんの児童・生徒

キッズ☆プログラム鑑賞講座「石川の工芸物語」が九月二十六日（日）に行われました。石川県が工芸王国と呼ばれるようになった理由を、前田のお殿様たちの時代から探ろうという視点で、「加越能の美術」展を含めて鑑賞しました。工芸物語ということで、今回のワークシートは、小さな本の形。前田のお殿様たちが関心を寄せていた茶の湯から集められた茶道具、つくらせた茶道具に始まり、鐙や刀剣を飾る加賀象嵌、調度を飾るはなやかな加賀象嵌。展示室に飾られているこれらの作品を見ながら、ワークシートに作品の写真をシールにしたものを貼っていきました。自分の見つけた工芸品を書くなどして半分自作の「石川の工芸物語」の本の完成です。参加してくれ

の皆さんが鑑賞してくれました。今回は、彫刻の作品一点を薄い紙で包み、隙間からみえるものから何の作品か当ててみる活動や自分の好きな作品について学芸員がインタビュするゲームなども行いました。対話型鑑賞では、作品をよく見て生徒たちそれぞれぞれの感じる心を通して伝えてくれた言葉から、深いところまで作品を鑑賞している様子がうかがえました。



十一月の行事予定

■土曜講座	午後一時三〇分～	美術館講義室	聴講無料
十三日（土）		「前田家と寛永文化」	村瀬博春 学芸専門員
二十日（土）		「大乘寺とその文化財」	谷口 出 普及課長
二十七日（土）		「陶芸四巨匠（波山・魯山人・憲吉・宗麿）」	南 俊英 学芸第一課担当課長
■百万石文化講座	午後一時三〇分～	美術館ホール	聴講無料
二十一日（日）		「芳春院と古典文学」講師／野村昭子氏（郷土史家）	
■キッズ☆プログラム	午後一時三〇分～	2Fコレクション展示室	参加無料
二十一日（日）		「アートゲーム大作戦」	

五、九八〇件。この三都府県だけで全国の半数近くに上ります。石川に数多く残っているのは、加賀藩主前田家によるところが大きく、文化大名として名を馳せた前田家は、利常、綱紀の時代を中心に優れた文化財を購入し、また現在にも続く美術工芸を育成し多くの作品を作らせています。ちなみに、前田家が残した文化財を保存管理する前田育徳会には国宝二十二件、重要文化財七十六件が伝わっています。



国宝「剣 銘吉光」

今尾景年 いまおけいねん 弘化2年(1845)～大正13年(1924)



この絵を構成しているのは、僅か一羽の木兔（木菟）と一本の枯木です。この僅かなモチーフで見るものを引き込んでしまう「力」は何なのでしょう。描かれるものが少ないほど、破綻なく画面を構成することは困難です。木兔と枯木の位置や角度が少しでも狂えば、この絵の絶妙なバランスは崩れてしまうでしょう。

緻密に描かれた木兔も見事ですが、枯木の表現は四条派の流れをくみ、筆法に熟達した作者ならではです。渴筆を用いた一気呵成ともいえる迷いのない筆勢。それでいて潤いのある墨の濃淡。技量の差が歴然と出るこのような題材は、腕に覚えのあるものでなければ選べません。

晩年の作とされますが、寸分の隙もないこの「簡潔の美」にいたる、景年のこれまでの精進が偲ばれます。それは「画の第一

番は意匠で、第二番が位置で、其次が技術でございますが。技術が悪ければ、仮令意匠や位置がなんぼ善くても、決してよい画とはいへませんからな」という景年のこの言葉にも端的です。

今尾景年は弘化二年（一八四五）京都の友禅悉皆業の家に生まれました。安政五年（一八五八）に四条派の流れをくむ鈴木百年に入門します。同門には上村松園の初めの師である鈴木松年や久保田米僊がいます。明治三十三年にはパリ万博に「春山花鳥図」を出品し、銀牌を受賞。その後、各国の万博に数度出品し、内外において花鳥画家として活躍します。明治三十七年には帝室技芸員、大正八年に帝国美術院会員となっています。大正十三年歿。享年七十九。

※第6展示室「系譜でみる近代日本画」に展示中。

次回の展覧会

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室	第4展示室	ご利用案内
橋本雅邦の襖絵	冬の優品選 —仏画・肖像画を中心に—	見透せぬ窓・ 前田さなみ展	コレクション展観覧料 一般 350円 (280円) 大学生 280円 (220円) 高校生以下 無料 ※ () 内は団体料金 11月の開館時間 午前9:30～午後6:00 (一部展示室を除く) カフェ営業時間 午前10:00～午後7:00
会期: 12月2日(木)～12月23日(木・祝)			

石川県立美術館だより 第325号 〒920-0963 金沢市出羽町2番1号
 2010年11月1日発行(毎月発行) Tel:076(231)7580 Fax:076(224)9550
 URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

11月の休館日は
29日(月)・30日(火)です